

原子力学会SNW

2008.3.4

市民と原子力専門家の 『ダイアログ』実現へ向けて

北村正晴

東北大学名誉教授

未来科学技術共同研究センター客員教授

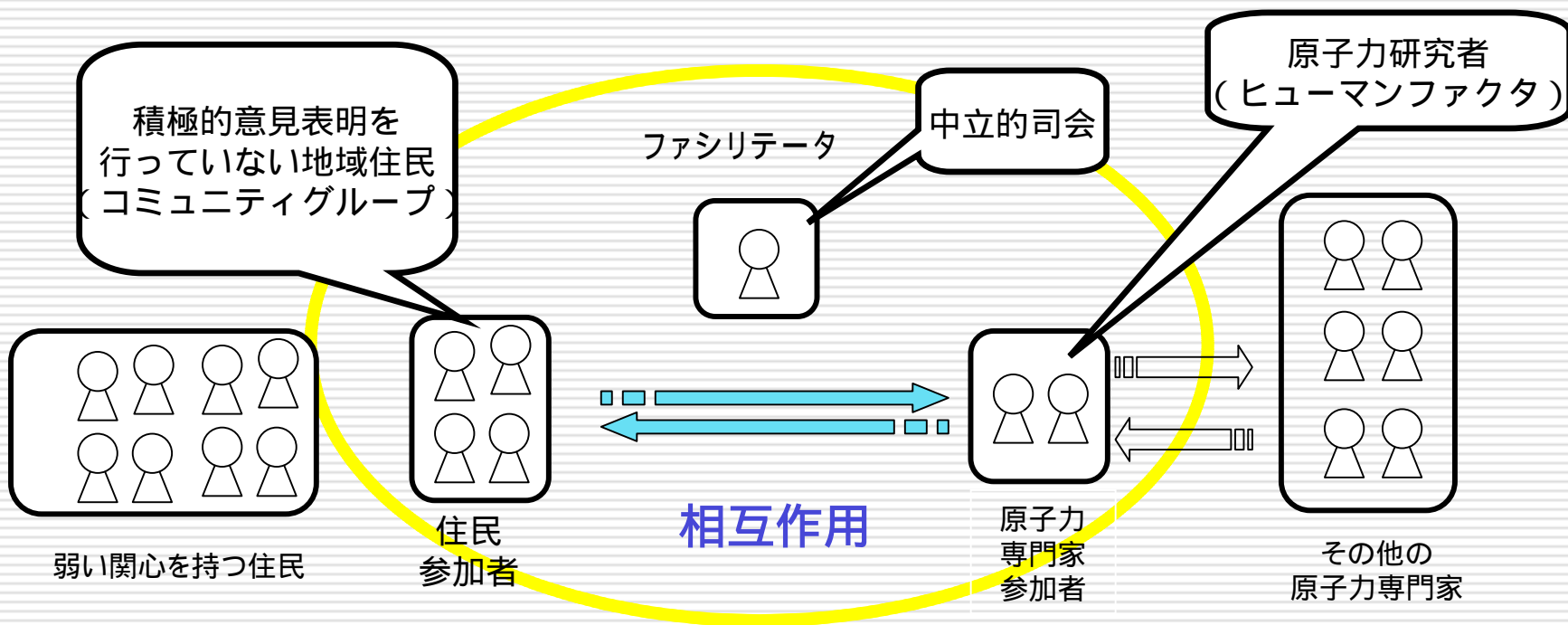
はじめに

- 「コミュニケーションの本質は対話です。」というコトバには基本的に賛同いただけよう。
- しかしこの小論では『対話』というコトバをあえて避けている。このコトバはなんとなく分かっているものとして聞き流される懸念がある。
- 代わりにあえて『ダイアログ』とした。そこでは、単なるコトバのやり取りを超えた、相手方の事情や思想、行動背景への理解が指向されている。
- そこまでの深い理解なしに、「正しい知識」の提示だけで問題が解消することは困難である。

この考えからの活動実績(02/9 ~ 08/2)

- 対話フォーラム(少人数、反復開催)
 - 宮城県女川町(東北電力女川原発):14回
 - 青森県六ヶ所村(日本原燃):18回
 - 予備的試行:福島県富岡町、福井県敦賀市他
- 特定テーマシンポジウム(80~200人)
 - 核廃棄物処分場に関するシンポジウム3回
- 市民との対話から
 - 市民側のはっきりした誤解や偏見については事実を踏まえて指摘する。
 - しかし原子力専門家側の認識不足も明らかにしてきた。
それらについては原子力系組織へ発信中。

対話フォーラムの基本設計



【四原則】

反復実施

参加者・話題を限定しない

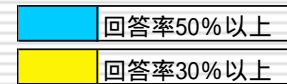
内容の非公開

参加者主体の運営

「信頼」の醸成

女川町住民参加者の変化

信頼の変化



(13人中)

	非常に信頼	やや信頼	どちらとも いえない	あまり 信頼できず	全く信頼 できず
開始時	15%	23%	23%	31%	8%
終了時	69%	31%	0%	0%	0%

理解・意識の変化

- 専門内容への疑問
- リスクへの感覚的理解

態度・行動の変化

- 専門家主導の運営
- 専門家参加者 住民参加者へのレクチャー

必ずしも「受容」にはつながらない

- 基本的知識を獲得
- リスクの不確実性・多面性を理解
- 主体的な「増員」の主体的働きかけ
- 多様な参加者を得るためのテーマの検討

専門家参加者の変化

信頼の変化

- 信頼獲得への疑念
- リスクベース議論成立への疑念

理解・意識の変化

- 「技術リスク」中心の議論の必要性

態度・行動の変化

- 丁寧な情報提供
- 比喻を用いた情報提供

- 住民参加者からの「信頼」を実感
- 議論成立を確信

- 「市民が感じるリスク」中心の議論

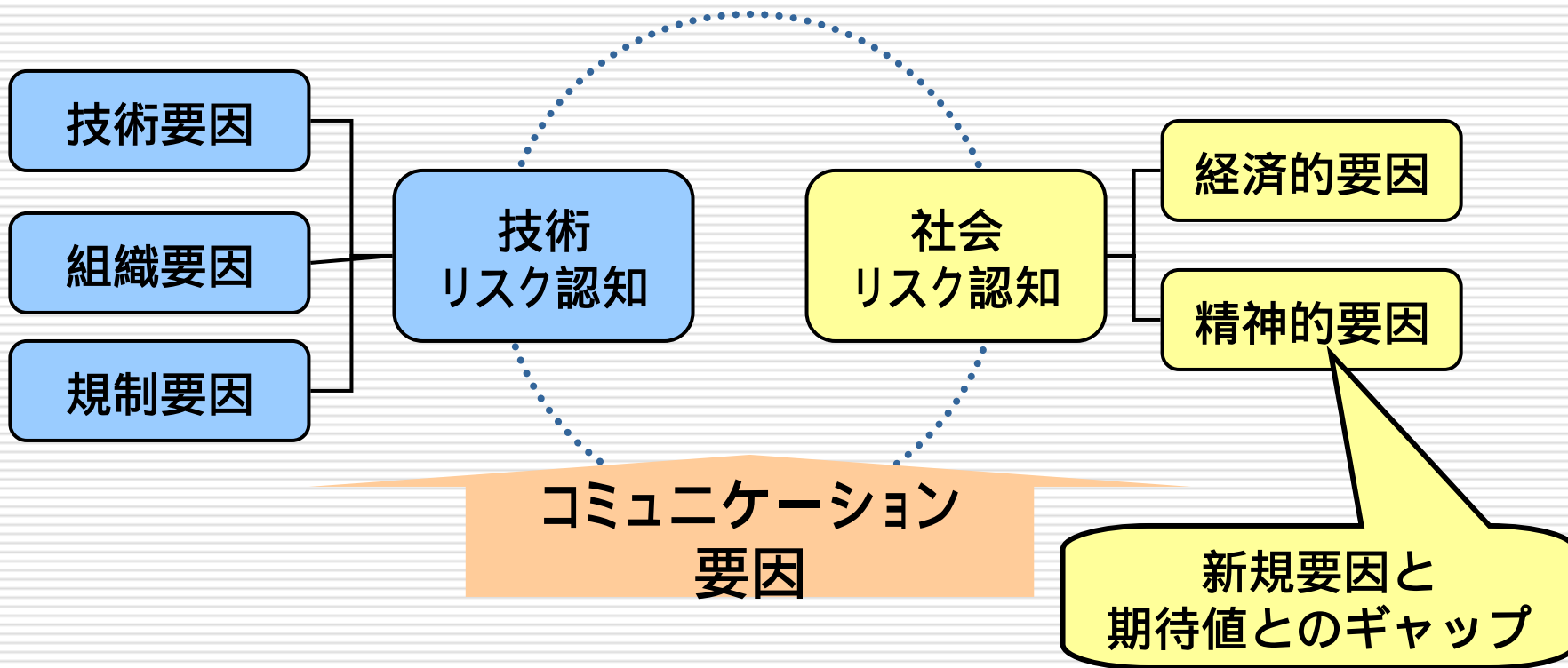
- 一部推測も交える
- 非公式情報に基づく見解
- ネガティブ情報の提供

変化しなかった主張

- 「実態論ベース議論の必要性」
- 「科学技術リスク低減の限界」
- 「リスクの社会的文脈依存性」

技術リスク認知の多様性

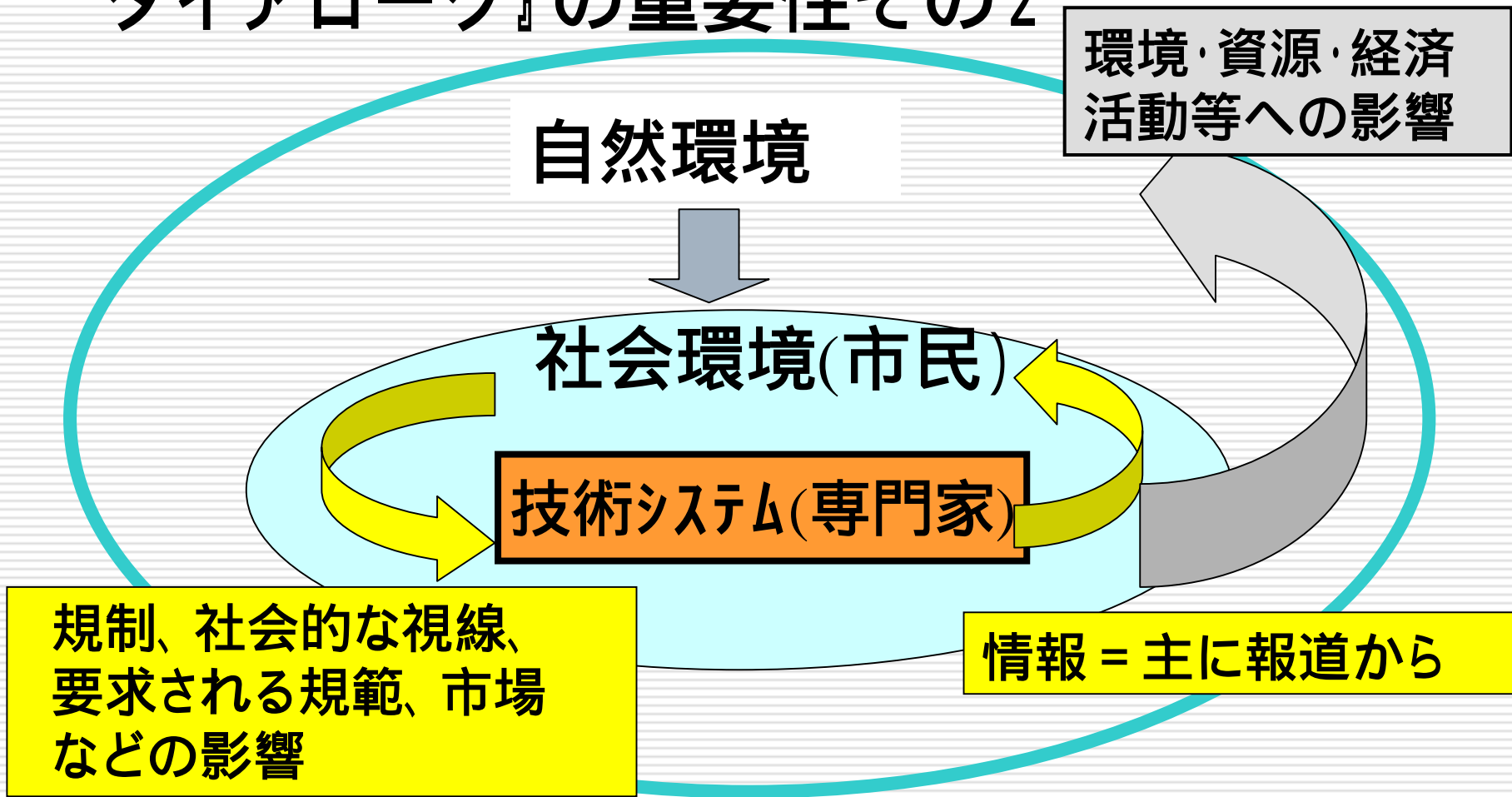
原子力に関するリスク認知マップ



リスク認知マップが意味するもの = 『ダイアログ』の重要性その1

- 標準的な技術的安全の説明 = 極めて不十分
 - 実はこの領域の説明だけでも課題含み
- ヒューマンファクタ、組織健全性への懸念対応
- 規制の実効性、独立性への懸念対応
- 経済的要因、精神的要因への対応の方向性
- コミュニケーション要因が全体的に影響
- 情報提供の実効性に加えて、『ダイアログ』の成立が本質的な役割を持つ。それなしに信頼は獲得できないし理解も進まない。

『ダイアログ』の重要性その2

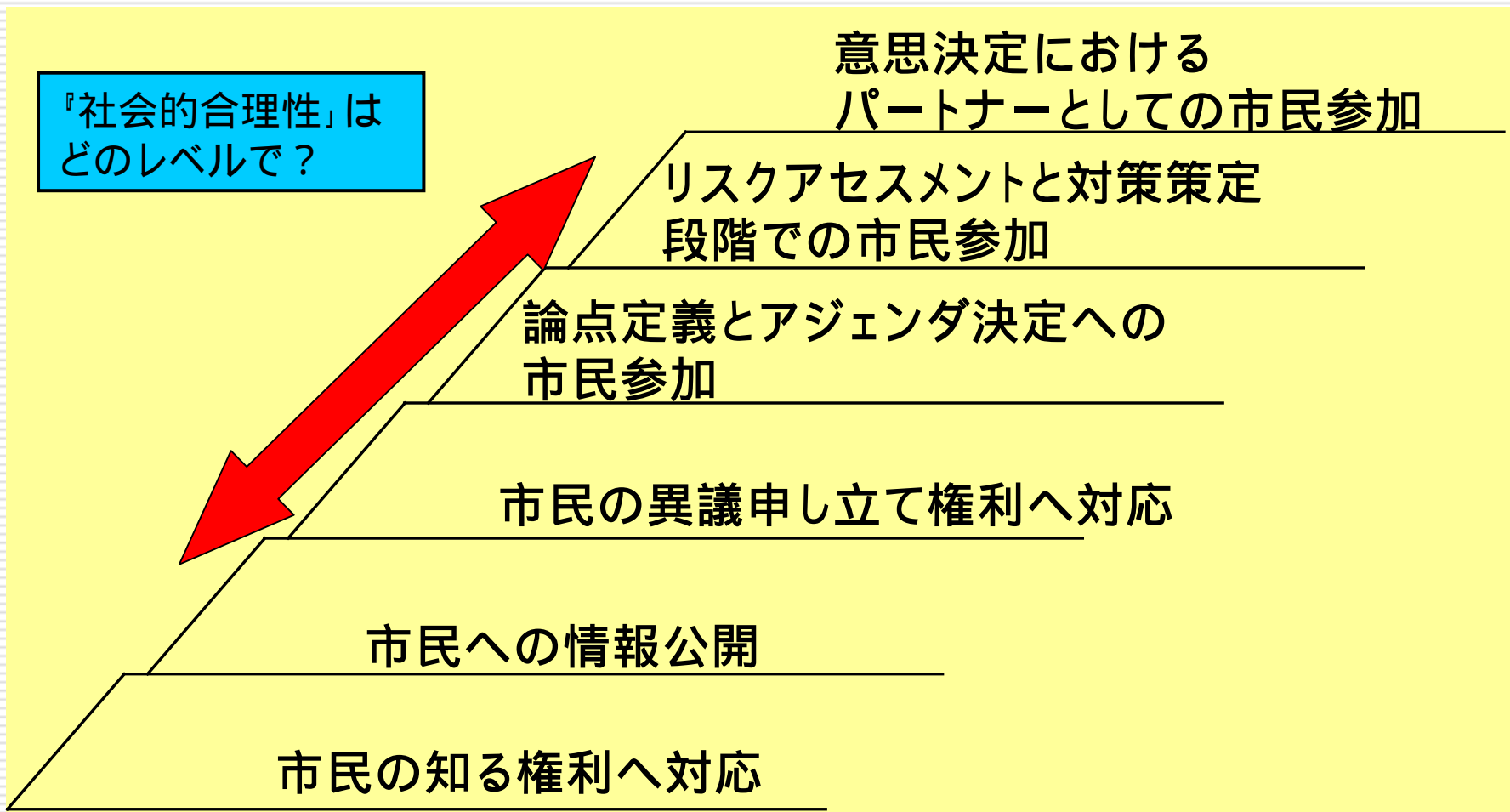


規制以外のFBの重要性も大きい。その適正化にも専門家の役割が大。専門家発ダイアログの必要性はここからも。

「社会的合理性」実現への道

- 現状固定でのディベート型論争, ゲーム理論的なコンセンサスの探求などへの直結は無理。
- 『モノログ』ではなく『ダイアログ』を目指した実践活動と経験知の蓄積が, 迂遠に見えても必要な営為である。
- …と考えて対話を継続中(場所、方式変えて)
- ここ一年の間でも新しい「気付き」は少なくない

市民・専門家『ダイアログ』の諸相



『ダイアログ』実現への要件

- 要件1: 「聴く」力の重要性
- 要件2: 「聴く」ことから何処へ？
(FAQとサプライ主導)
- 要件3: 確証バイアスの相互認識 (専門家過去)
- 要件4: 「双方向」コミュニケーション？
- 要件5: 専門的知識と価値依存意思決定
- 要件6: 対話の「枠組み」 (= 設計と運用規則)

実践経験のまとめ

- 社会的合意形成への市民参加:大きな流れ
- 熟議プロセスなしの意思決定は非合理
- 市民の「科学技術リテラシー向上」も実践から
- 専門家側が「社会リテラシー」習得を。本講演で例示した困難への対処能力はぜひ必要。
要するに、
- 最初の一歩は専門家のダイアログ必要性認識と実践から。すでに着手している専門家活動も多いが、欠如モデルベースではなく社会からの学習にも注力を期待する。